

2 学期始業式講話

おはようございます。本日より 2 学期の始まりです。

夏休みはいかがだったでしょうか。先月末に登校日でしたらからほぼ 1 か月、その前の 7 月 28 日に熊本地震がありましたね。富士地区は 6 月 26 日の金曜日の夜に地震がありましたけれど、覚えていますか。先週も夜に枕元にあった携帯電話がけたたましく鳴って、その後すぐに地震がありました。さらにこの地震に加えて線状降水帯が各地で発生しました。千葉県、埼玉県、そして富山県ですか、あつという間に豪雨になって、道路は冠水状態になりましたね。とにかくこの夏は自然災害が多かった印象がいたします。有事の備えを考える機会となりました。

さて、夏の風物詩といえば高校野球です。今年は野球部が頑張りましたが、改めてチームプレー、チームワークというものについて考えさせられました。野球の勝利インタビューはまずは監督さんです。次に活躍した選手、そして投手が定番かと思います。この風景を見ていると個人にスポットが当たるのですが、実はそれを支える裏方がどれだけ存在するかを、私自身高野連の仕事をさせていただいて勉強になりました。

まずベンチ入りは 20 人までなんです。それ以外はボールボーイ、これが大変でファールボールを草むらで探し出すのがやっかいな作業です。そしてファールボールが当たらないように笛を鳴らす仕事があります。一番大切なのが応援で、これなくしてはなりません。応援次第で勝利を呼び込むことができるからです。そしてマネージャーはスコアをつけるのが大変です。野球のスコアはかなり複雑で、パソコンではそのソフトがあるくらいです。さらに校旗や国旗を掲げる仕事やウグイス嬢、すなわちアナウンスの仕事があります。それら多くの支えがあって試合が成り立つんです。

私はいつも様々なスポーツを見に行った時、控えの選手がどれだけ自分事として応援しているかに注目しています。強い学校ほどそれが顕著です。つまり選手は周りの支えがあってこそ初めてプレーに専念できるわけです。

そうしたチームワークで奇跡が起きた例を紹介しましょう。

それは 10 年ほど前に勤務した前任校の話です。競技は駅伝で、駅伝は 7 人が襷でつなぐ長距離リレーです。7 人全てが速ければいいですが、なかなか 7 人揃えるというのは大変で、それゆえに距離が違いますので、それぞれに配置するわけです。10 年前、県内でもかなり早い選手が 3 人ほどおりましたので、優勝のダークホース的存在でした。当日の皮算用では、1 区で 30 秒ほど差をつけて、4 区のエースが 1 分半ほど差をつけて逃げ切るという作戦でした。ところが、1 区でトップになったのは良かったのですが、8 秒しか差がつかず、その後 4 位までに落ち込み、4 区のエースにつないだ時には 1 分近く差を広げられてしまいました。しかし 4 区の選手は猛烈な勢いで追いついて 1 位におどり出ることができました。しかし 2 位には 15 秒しか差をつけられず、当初の 1 分半とはほど遠いものでした。

保護者の皆さんは顔面蒼白で、口もきかずに見守っていました。暗雲たちこめるとはこん

な状況をさすのでしょうか。駅伝の応援の難しさは各地点の一部でしか応援できないということです。その時私は近くで応援していた保護者の方に聞きました。「こういう時に普段勝てない選手に勝つ時はありますか」と聞いたところ「まずありませんね」というつれない言葉でした。

しかし5区の2年生は抜かれずにその差を守り、次の6区の1年生は区間賞までとる走りをみせ、最終の7区では1分近く差を広げたのです。そしてトップでテープを切ることができました。まさに奇跡はおきたのです。予想では抜かれるであろう後輩たちが先輩のために死に物狂いで走ってくれたのが大きく、彼らはみな号泣していました。

今もあの時のことを思い出すと目頭が熱くなりますが、チームプレーの団体戦はえてしてこうした奇跡は起きるんですね。つまり勝利を呼び込んだのはチーム全体が一丸となり、皆さんが支えあった証だと思います。

この秋は来月末に南稜祭体育の部で、各クラスの団結する機会があります。部活動でも様々な大会があります。是非そうした時にチームを支えあうことで勝利を味わってほしいと思います。

以上で校長講話としたいと思います。

(令和8年8月28日、始業式)